

ちやんと、叱られてるかあ？

二〇〇八年北京オリンピック・女子ソフトボール決勝。

三試合連投の上野由岐子投手が投げた四百十三球目で、日本は悲願の金メダルを手中にした。

歓喜する選手、監督、コーチ。

そのメンバーを育ててきた人がいる。その人はグラウンドにいなかった。解説者であることを忘れて、ブースを飛び出した。そしてグラウンドへ。アテネオリンピックを最後に、代表監督の座から去っていった人。

「グラウンドに立てなかったという口惜しい心でいっぱい、嫌な自分がいました」

大きく波打つように上下差の激しいコースが間断なく続いて、遙か彼方まで伸びている。

上空から見れば、一本の完璧な直線。不思議なジェットコースター。

乗っているのは宇津木妙子さん(六十一歳)。

動力源はこの人の底知れぬエネルギーだ。

元 女子ソフトボール日本代表監督

宇津木 妙子

半世紀にわたるソフトボール人生は起伏に富んでいた。

日本代表監督として、シドニーオリンピック銀メダルで急上昇、

アテネでは銅メダルを獲りながらも世間の評価は激しかった。

容赦ない叱責、罵倒、速射砲ノック。猛練習で体力の限界まで選手を

鍛えぬく、そのやり方に、何故そこまでとの声もあがった。

「指導者になってから、軸は一度もブレることがなかったです。

ソフトボールだけじゃなく、選手たちが生活していく上で、あたりまえの

ことをあたりまえにできるような人にならなければいけない、そう思って

やってきました」

その信念はブレることがなかった。

選手それぞれの限界ストレスを瞬時に察知する、この女性監督ならではの

類まれな能力があつてこそ成し得たことだった。

二〇〇五年、日本人女性として初の国際ソフトボール連盟殿堂入りを

果たした。

宇津木 妙子(うつぎ たえこ)

1953年4月6日生まれ。埼玉県出身。川島町立川島中学校在学時よりソフトボールをはじめ、1971年にユニチカに入社。実業団のユニチカ垂井ソフトボール部に所属。1974年には、最年少で全日本選手として世界選手権に出場し、チームの準優勝に貢献した。1984年に現役引退後は、日本リーグの日立高崎(現・ビックカメラ高崎女子ソフトボール部)の監督に就任。日本リーグの中では、初の女性監督だった。当時3部のチームを3年後には1部に昇格させ、その後は日本リーグ優勝3回等の成績を飾る。

「ユニチカに入った時はオチコボレでした」

一九七一年、埼玉・星野女子高校を出て、実業団・ユニチカ垂井ソフトボール部に。

同じ高校から、東日本ナンバーワンと言われたピッチャーと二人同時の入部。

東京駅まで見送りにきた恩師に「おまえは付録だから」と言われる。

エースピッチャーとセットで入部させたという意味。新幹線のトイレで思い切り泣いた。

それで心は決まった。「見返してやる」

だが、同じサードのポジションの先輩は、はるかにうまかった。自分のあまりの不器用さに、呆れられたこともある。

「なんとか先輩が怪我しないかなと、毎日祈ってました」

それほどまでレギュラーになることにこだわっていた。

皆がまだ寝ているうちに起き、寮をそつと抜け出して、走る。秘かに練習を積んだ。

そんな矢先、ライバルの先輩が捻挫。先輩が怪我している間に何がなんでもと、必死、全力、



ユニチカ時代は内野手として活躍

死にもぐるいで、ボールに向かっていた。

ノックで捕れそうもないファールフライを追ってヘッドスライディング、三遊間の鋭い打球にダイビングする。イレギュラーバウンドにも身を挺してボールを前に落とす。とびきりの根性だけは発揮できた。

監督の感想は「面白い選手」

「うまい選手」ではなかったが、そのアピールが効いて、次第にレギュラーの座を獲得していく。

当時の実業団はどこでも先輩・後輩の上下関係が厳しかった。

先輩のバット、グラブ、スパイクを磨き、二人の先輩に一時間ずつマッサージをする。

冬の洗濯の辛さ。鹽（まじ）に凍りそうな水を張り、洗濯板の上で泥だらけのユニフォームをモミ洗

いする。

先輩たちの食べたラーメンの残り汁を後輩が全て飲み干さなければいけない。毎回トイレに駆け込み、吐く。

たとえば、スキヤキの時は先に先輩たちが肉・野菜を食べ、残ったシラタキのくず、ハクサイの芯を後輩たちが食べる。いわれのない説教。理不尽なことの数々。

早くキャブテンになりたかった。

この慣習を変えたい。

午後二時半までは一般社員として働く。最初の三年間、与えられた仕事はトイレ掃除。

その後、就いたのが女子寮の寮母。

生活指導を任せられる。

一人で千人位の寮生の面倒をみていた。職安安定所に提出する求人票数千通を全て手書きでやった。担当の寮生全ての名前と顔をおぼえ、必ず名前を呼んで、話しかけた。

土曜日になると、寮の扉を乗り越え、遊びに出る子がいた。扉の外で待ちかまえて、体当たりして捕まえ、激しく叱った。その子は泣きながら言った。

「叱られて、うれしい」

そこまで私を思ってくれる人がいる。

「規則違反する子の中には、自分の存在を誰かに認めてもらいたい、と思っている子がいるんです」

鉄道公安に捕まって、引き取りに行ったこと。自殺しそうな子と手首をひもで結び合って寝たこと。

工場（）で小指を落とした子に、縫合手術後、三日間眠らず患部のマッサージを施したこと。

人へのおもいやり、気配りの大切さ。

生来持っていたに違いない指導者としての資質が、この時期に磨かれていった。

キレのあるプレーで注目されていたユニチカでの四年目、キャブテンになる。

それまでの悪しき慣習を次々と変えていった。先輩たちの凄まじい反発がある中、食事は後輩から、洗濯や道具磨きもそれぞれですること。

練習も漫然とやるだけでなく、目的意識をしっかりと持つことを部員に求めた。



練習試合中、選手にけきを飛ばす © 読売新聞社

選手の意識があつたという間が変わっていき、なんと一年目の春の実業団大会で優勝。

ユニチカの黄金時代がやってくる。

毎日が必死で、おせっかいで、心配性。

「あの時、人の扱い方を勉強したんです」

人を鞭打ち、自分を鞭打つ

一九八四年、ユニチカ垂井を辞め、選手生活にピリオドを打つ。

八六年、日立高崎ソフトボール部(現・ビック

カメラ高崎 二〇一五年一月より)監督に就任。

三十三歳。

監督を引き受ける時、父親が言った言葉が今も胸に残る。

「監督とは社長代行であり、用務員であることを忘れるな」

当時日立は三部リーグ。部員十二名。出れば負けのチームだった。

伝説ともなった「一分間四〇本の速射砲ノック」

ク」がここで生まれ、ユニチカ時代の「猛」の付く練習メニューを更に厳しいものにする。

「速射砲ノック」は精神や肉体を鍛えるためだけではない、という。

「ノックする自分が潰れるか、選手が潰れるか、という限界までくると、雑なプレーにならず、むしろ力がぬけて無駄のない理想的なグラブさばきになります」

それを体が覚えこむためにも、限界ストレスまで追い込むことが不可欠なのだ。

同時に行った意識改革。

相手にもされなかった一部リーグのチームに頼みこんで、練習試合を続けるうち、次第に相手との力の差が詰まってくることを選手たち自身が感じていく。

宇津木監督は部員以上に体を動かしながら、コミュニケーションをとる。

「選手以上に動かなかったら、ここまでは出来なかったでしょうね」

選手それぞれ、プレーに癖があり、ゲームする上で支障をきたす。

「癖」は直そうとして、直せるものではないが、「使える癖」にすることはできる、という。

「悪いところを悪いと考える前に、それをどう活かしていくか、まずそれを考えた方がいいです」

集中力を鍛えるには日ごろの生活や行動から見直す必要がある。そこに、徹底してこだわった。

挨拶、整理整頓、道具を大事にする。正しい食事、十分な睡眠。仕事時間は精一杯、仕事をやれ。

来る日も来る日もピンタはとんだ。

脱いだ靴の乱れ、挨拶の声が小さい、食事を残す、だらしない態度。

「毎日、誰かを怒鳴りつけてました」

選手とのゆるぎない信頼関係があつてこそ初めて成り立つこと。

「ほんとに真剣にソフトをやるかどうか」は「ほんとに真剣に生活しているかどうか」と同義だという。

練習の終わった後は、一緒に風呂に入り、オチコボレ時代の苦勞や他愛もない馬鹿話をした。監督、選手の垣根を取り払い、文字通り裸のつきあい。

監督二年目、リーグ入れ替え戦を制して二部へ、その翌年には一部リーグ入り。さらに翌年には優勝、と破竹の勢いで頂点まで登りつめた。

女に何ができるんだという半ば見下した社内

の空気が、勝ち続けるうち好意的なものに変わっていった。実業団チームは社員の士気を高めるためにある。常勝チームになれば企業イメージアップにもつながる。

叱る時は皆のまえで

多くの素晴らしい選手と出会い、育ててきた。

選手の獲得に乗りだすと「宇津木監督が厳しすぎるから、行きたくない」ということが度々起った。一方、是非、宇津木監督に鍛えてもらいたい、と切望する選手も次々と現れた。

一九七八年、中国・南寧で行われた日中交流



試合に日本代表の三塁手として参加していた。

二十五歳。心・技・体、宇津木さんが選手として、もっとも充実した時期だっただろう。そのプレーは際立っていた。

俊敏な動き。小さな体で弾き返す驚くべき打球の鋭さ。球際の強さ。

大勢の観客の中に、その生き生きとしたプレーに夢中になった十五歳の中国人少女がいた。その名は任彦麗（ニン・エンリ）。

この人の下でプレーがしたい。

その少女が、十年後、日立高崎に属し、帰化して日本のソフトボールを変えていった宇津木麗華選手である。

どんな優れた選手も特別扱いしない。それが宇津木監督の流儀だ。

「後輩は先輩を見て育つ。後輩がだらしなかつたとしたら、先輩の責任だと思ってます。麗華が来たのは二十五歳で一番年齢がいった。後輩がヘマをした時、麗華をどやしましたよ。来て二カ月くらいだったか。麗華は何のことだか、わからなかった。だから説明しました」

「中国では、人を殴ったら刑務所だよ、ってあとになつたら笑い話」

そして、もう一人。北京オリンピックで、日本を金メダルへと導いた上野投手。

高校時代からその並外れた速球は全国に知れ渡っており、多くの実業団が獲得に乗りだしていた。

上野選手に会った時、「うちは特別扱いはいらないよ。自由はないよ」とそっけなく言い、後輩がやるべきこと、ルールを話した。

それは他の実業団が持ちかけた甘い条件とは大いに異なっていた。

そして、参加させた練習では、徹底的に、しごきにしごいた。

疲労困憊、へとへとになった上野選手が九州の実家に戻った翌日、母親から電話があった。

「娘をよろしくお願いします」

家庭で子どもを育てる力が弱くなっている

現在、二〇二〇年東京オリンピックでの種目復活を目指して尽力、子どもたちを指導する傍ら、執筆、講演活動をおこなっている。

ある学校の講演会に行った時のこと。壇上が上がっても会場のざわめきが収まらない。

「聴きたくない人は出ていきなさい」

何人かの子どもたちが出ていった。

驚いたことは、それを止めようとする親や教師がいなかったことだ。

聴衆の前で、出ていこうとする子どもたちに「かわいそうだね。親や先生から見捨てられてるんだよ」

終わって会場を出ると、その子どもたちが待っていた。

「ありがとうございます」と挨拶したという。講演会や指導活動の場で、大人にも子どもにも聞く言葉がある。

大人には「叱ってますか？」

子どもには「みんな、ちゃんと叱られてるかあ？」

数々の栄冠を手にしてきた。

しかし、代表監督を務めた二度のオリンピック。金色のメダルは思い切り伸ばした指先をかすめて、アメリカチームの手に落ちた。

「私の采配ミスです」

全てを引き受け、引き取って生きてきた人。

宇津木ジェットコースターは真っ直ぐ、もつと真っ直ぐ、先へと走る。

ソフトボールが真にメジャーになることをめざして。

関連サイト情報



●NPO 法人ソフトボール・ドリーム
ソフトボールを通してコミュニケーション能力を育成し、体力・運動能力の向上を目指すNPO法人。青少年の健全育成のため、「支援学校」「養護学校」などへの訪問、各学校への用具の寄贈や各地域での講演・ソフトボール教室開催などを行うほか、ロンドンオリンピックやリオデジャネイロオリンピックで競技から外されているソフトボールのオリンピック復活へ向けた活動を行う。
<http://www.nposbd.com/>